



Title	生活のなかで浮き上がる場所
Author(s)	井坂, 智人
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 357-358
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68228">https://doi.org/10.18910/68228</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 生活のなかで浮き上がる場所

しょうないガダバ 管理人 (未来共生プログラム1期生)

井坂智人

管理人としてガダバに住み込むようになり2年が経過しました。ガダバには自分の部屋がひとつ、あとは共用です。ガダバでは鍵の開け閉めや掃除、ゴミ捨て、緊急の対応など生活に係ることだけでなく、イベントの手伝いなども行っています。私自身も外国人旅行者が気軽に宿泊できる「カウチサーフィン」という活動をしています。ガダバの活動は生活に密着していますが、それだからでしょうか、ガダバを端的に示す言葉が思いつきません。ガダバはどのような場所であるかを聞かれることが一番困ります。

例えば、未来共生プログラムの後輩履修生から、「井坂にとってガダバは居場所ですか?」と聞かれることがありました。自分にとってのガダバは、いわゆる居場所とは違うと考えています。

ガダバで生活しているのに居場所ではないという不思議な気がします。ですが、居場所の条件として帰属意識や「帰る場所」という感覚があるとして、海外から日本に帰国したとき「帰ってきたなあ」と思いますが、そういった感覚としてガダバを捉えることはありません。

管理人としての個人スペースはありますが、それも薄板一枚での区切りです。ガダバは、自分のスペースを明確に決めて使用できるような広い場所ではありません。空間を区切ることで、むしろ自分の空間を誰かが使用しているような気がしてしまうこともありました。

ですから、僕はビジターとして接するようにしています。ビジターであればプライベートな空間は存在しないからです。空間的な狭さもありメリハリを付けにくい場所です。ですが、あまり区別がないことは、ガダバが誰でも受け入れる懐の広さに繋がっているように思います。私もそのような心持ちの利用者として、ガダバに参加しています。

空間的メリハリだけでなく、ガダバには「こうあるべき」というルールや将来展望に関わるビジョンが不明瞭な場所です。ガダバを「いつでも宿泊と食事ができる場所」と紹介することがあります。今日の社会的課題

に向きあうための大きな看板を掲げているわけですが利用者は限定的です。毎日誰かが食事に訪れるというようなことはありません。イベントを毎月行うので、訪問者は多いかもしれませんがコアメンバーが増えていく実感はあまりありません。

ガダバを「みんなの家」と表現することもあります。その比喩が示すように、誰にでも居心地よい「家」というのは難しいのかもしれませんが。もちろん、誰もがガダバを「家」と思ってくださいというのも無茶な話です。「家」や「家族」といいながら、私がデジタル感覚なのも問題なのかもしれません。もしかしたら、輪番制にして、行き場のない人を受け入れることを大々的に広報すべきなのかもしれません。こうした活動実態を振り返るとき、管理人としての不甲斐なさを感じるとともに、ガダバの活動を批判的に考えるべき点もあると思います。

ですが、利用者が何十名いるから良い活動・必要とされている活動という物差しでは語れない活動もあると捉えています。ガダバのように広報をしなくても、こども食堂のような定期的で、しっかりとした活動体ではなくとも、ガダバを求めて訪問される方がいます。ときにそれは専門機関を訪問すべきではないかと思えることもありますが、そうした場所に出向けない、足が向かない人がこの町で生活していることも確かです。

僕にとってガダバは居場所ではなくとも居心地のよい場所です。空間的にも理念的にも整備された場所ではありませんが、僕はそうした活動にも役割があると感じています。ガダバとは、日の当たる場所で、真正面から社会的課題に向きあう市民活動というより、路地裏にあって重い言葉を使わない活動です。生活のなかで浮き上がるようなイメージです。生活のなかでは重い言葉をつかうことはありません。「貧困」「不登校」「人権」といった重い言葉を使わない、ただの「家」や「家族」のほうがわかりやすく、共感を結ぶことができるケースがあります。共生社会が目指されるなかで、共生を真正面から語らない、そうした場所も必要ではないか、と思うのです。

(本原稿は2017年11月現在、国際NPOインターン生としてイスラエルで活躍する井坂さんの一時帰国時にインタビューして作成しました)